転生する神話――「日本思想史」は描きうるか――

苅部　直

ミルチャ・エリアーデによれば、神話とは、この世界の始まりにかかわる物語である。それを語り伝え、再演する儀式の場を通じて、人は世界を始めた超自然者たちの世界にふれ、物語に現われる英雄のふるまいを、みずからの生の模範とすることになる（Mircea Eliade, *Aspects du mythe*, 1963, 中村恭子訳『エリアーデ著作集7　神話と現実』、せりか書房、一九七三年）。

日本において、『古事記』『日本書紀』に記された物語が、そうした意味での「神話」であったかどうか。それが神話として人々のあいだに生きているには、その物語を共有する儀礼の空間や、知識伝達の回路が必要なはずであるが、それは日本の歴史の中で、どのような形で、いつの時代に存在していたのか。そう考えると、『古事記』『日本書紀』の物語についても、それが古代から近代に至るそれぞれの時代で、いかなる意味で「神話」であったのか、それ自体が思想史上の考察対象として、重要になってくる。儀式の中で生きられる神話と、それを言語化したテクストとの違い、また、「神話」テクストを指定する後世の選別まで視野に入れれば、問題はさらに複雑になるだろう。

そもそも、「神話」という漢語それ自体、おそらく明治時代の日本で、十九世紀西欧に成立した神話学の知

見を承けながら、mythの翻訳語として作られたものであった。大槻文彦の国語辞典『言海』（一八九一年完成）にその項目はなく、『明治文学全集』（筑摩書房）の収録文献でもっとも古い使用例は、上田敏が西欧の文学研究を論じた「細心精緻の学風」（一八九六年）におけるものである。近代の歴史学も、その草創期に記紀の物語を呼んだ呼称は、「古史」「神代史」もしくは「古伝説」であり（田口卯吉・久米邦武の例）、それを「神話」と名づけ他国のそれと並べる言説は、「日本民族」の起源を考察した高山樗牛の評論「古事記神代巻の神話及び歴史」（『中央公論』一八九九年三月号）を、さらに『比較神話学』（一九〇四年）に代表される高木敏雄の仕事を待たねばならない。

このシンポジウムが設定した議論の軸は、『古事記』『日本書紀』に体系化された神話群が、のちの時代においてどのように解釈されていったのか、その跡をたどることである。どの範囲の人々に、いかなる形で受容されたかは時代によって異なるにせよ、そうした神話群を解釈する営みは、いつの時代でも何らかのあり方で存在し、さまざまな思想を生みだしてきた。その軌跡を、かつてのように一定の「日本精神」の存続と見なすことは、もはや難しいにせよ、そうした解釈の営みが、「日本」と「日本人」をめぐる物語を、それぞれの時代に応じたあり方で紡ぎだしていたのは、否定しえない事実である。これを長い時間軸に沿って通観することで、これから「日本思想史」を新たに描くためのゆるやかな枠組と、その作業が直面することになる問題が、明らかになるだろう。

シンポジウムでは、荻生茂博氏と樋口浩造氏の司会のもと、神野志隆光氏に古代・中世、前田勉氏に近世、清水正之氏に近代を担当して頂き、それぞれの時代についてのご報告があったのち、磯前順一氏（学会外からのゲストとして）と山東功氏からコメントを頂いた。なお残念なことに、司会の一人、荻生茂博氏は、このシンポジウムの半年後、二〇〇六（平成十八）年二月二十六日に急逝された。謹んで、その面影を偲びたい。

（東京大学教授）